

NPO 法人 日本ビオトープ協会  
第 16 回顕彰受賞ビオトープの紹介

◇顕彰委員会委員長の講評・報告

『ビオトープフォーラム in 仙台 2024』2024 年 6 月 14 日、東北大学 青葉山新キャンパス 環境科学研究所 本館 2 階 大講義室にて

第 16 回顕彰を受賞されました団体の方々にお祝い申し上げます。

去る 4 月 16 日に顕彰委員会が開催され、全国から 5 団体が選出されました。いずれも、多様なステークホルダーの協力によるビオトープの造成に始まり、維持管理、環境教育、地域貢献など優れた取り組みであり、高く評価されました。

◎ビオトープ大賞を受賞されました、静岡県「あさはた緑地ビオトープ」は、静岡市麻機遊水地内に設けられた官設民営の「自然体験型ビオトープ」です。市民の憩いの場、湿地帯の特性を生かした体験農園、生物多様性に富む自然湿地の回復、環境学習・農業体験の実施などが行われています。地域住民、学校、ボランティア、ビオトープ専門家などの協働で維持管理がなされており、高く評価されました。

◎審査委員長賞に選定された、宮城県「仙台・みどりの杜ビオトープ」は、東日本大震災津波被災地の復興事業としてビオトープを造成し、自然物中心に、自然の回復に努めています。地域住民と協力し、固有種の井土メダカ・ミスアオイの保全に務め、毎月自然観察会を開催し、高く評価されました。

◎技術特別賞受賞の、愛知県「調整池のビオトープ」は、近自然工法による調整池を中心に整備された、生態系ネットワークの拠点ともなる公共ビオトープです。整備後 4 年を経過し、水生生物の生育、希少な生物の生息場として市民の憩いの場となっていて、高く評価されました。

◎学校ビオトープ特別賞に選定された、滋賀県「老蘇小学校ビオトープ」は、設置後 22 年の学校ビオトープ。学校と地域の人々との協働で、維持管理、自然観察会などを行っており、地域交流・学びの場となっています。また、失われる地元の樹木、湿地の自生植物を移植するプロジェクトでもあり、この長期にわたる活動が高く評価されました。

◎環境教育賞に選定された、広島県「広島県立湯来南高等学校 ビオトープ」は、自然に恵まれた小規模高校内に整備されたビオトープです。持続的な環境教育の場となることを目指し、オオサンショウオ、ジュンサイ、モリアオガエルなどの観察、湿地の自然性の維持管理を生徒中心で行っており、高く評価されました。

以上 5 件表彰させていただきましたが、各団体におかれましては、ビオトープの普及啓蒙、環境教育、地域活性化につながる活動を継続していただくようお願い申し上げます。


(協会顕彰委員長 鈴木邦雄代表顧問)




※フォーラムの顕彰事例発表「あさはた緑地ビオトープ」「仙台・みどりの杜ビオトープ」は、後日 YouTube で映像を公開する予定です。詳細は、協会 WEB ページに UP いたします。 2024 年 6 月 25 日

## ◇ピオトープ大賞

【下記各顕彰書類より転記】

名称	あさはた緑地ピオトープ
受賞者	一般社団法人グリーンパークあさはた
<p><b>【テーマ・概要】</b>                  静岡市が麻機遊水地内に「自然とふれあう体験型の都市緑地」というテーマで設置した官設民営の緑地公園。生物多様性を育む湿地帯にある特性を生かして、プレイエリアの原っぱの周りは土側溝で囲み、農園エリアでは地域特産のれんこんや、稲作を行う一方で休耕地を設けて植物の繁茂を促すことで、希少動物のカヤネズミをはじめ多様な動植物の生息域としている。また、湿地エリアではミスアオイやオニバスといった希少種に適した水深の調整、攪乱などがされている。運営においては「未来につながる緑のあそび場」をコンセプトに、環境学習や農業体験を実施。園内の動植物の塗り絵やザリガニ釣りなど、楽しみながら生態系等を学べる工夫をしている。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b>                  公園利用者の快適性・安全性と、公園の魅力でもある生物多様性の維持・向上のバランスに注意を払っている。園内の除草では遊ぶスペースは確保しつつ、意図的な刈り残し箇所を多数設け、また季節ごとに移動させることで多様な植生のバリエーションを生んでいる。刈草は剪定枝で作ったバイオネストに集積して生物多様性の一助としているほか、堆肥化して農園に利用することで循環させている。また、農園や水辺の管理では自治会、地区社協、近隣の学校などにも協力いただき、積極的な地域連携をおこなっている。湿地帯の整備ではボランティアメンバーと選択除草や水流、水深の調整など多様な地形づくりを試しながら実践している。</p>	
	

## ◇審査委員長賞

名称	仙台・みどりの杜ピオトープ
受賞者	せんだい農業園芸センター みどりの杜、株式会社日比谷アメニス 仙台支店、日比谷アメニス・日比谷花壇共同事業体（仙台市）
<p><b>【テーマ・概要】</b>                  ～復興ピオトープ（みどりの杜ピオトープ）～                  当地は、13年前の「東日本大震災津波被災地」であり、自然の驚異を体感させられた地である。8年前から、復興事業（PPP事業）として当園の再興に取り組むにあたり、自然災害で起こった「改変」から、「自然回復力」が、どう進んでいくかを「遷移」も含め、確認・育成していく場として「ピオトープ」を新規創出した。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b>                  ○整備方針：この公園エリア再整備にあたり①既存施設との連携②自然物での造形③バリアフリーを基本としている。                  ピオトープでは、コンクリート躯体を避けるため、防水シート張り。水については、当初雨水（屋根からの）利用を考えていたが、雨樋がなく集水が難しいため、周囲緑地からの表面水および補水（水道水・井戸水）にて、水量を確保している。                  ○管理手法：基本的には手を入れず、自然に任せている。清掃については随時実施し、5年に1度程度「泥上げを」を実施し、水深を確保するよう努めている。                  ○利活用：当ピオトープでは津波被災時絶滅状態となる固有種である「井土メダカ」の育成・保全の場とし、地域住民と協力している。また、毎月開催している「自然観察会」の場として、動植物の生態観察にも利活用している。</p>	
	




「あさはた緑地ピオトープ」より




「広島県立湯来南高等学校ピオトープ」より




## ◇技術特別賞

名 称	調整池のビオトープ
受賞者	近自然技術研究所、オリエンタルコンサルタント、ヤハギ緑化株式会社
<p><b>【テーマ・概要】</b>          長久手市は 2011 年 3 月に「長久手市環境基本計画」を策定。2012 年 8 月に「公園西駅周辺環境配慮型まちづくり基本構想」、2013 年 5 月に「公園西駅周辺環境配慮型まちづくり整備計画」を策定しました。「人・コミュニティ・自然がつながる持続可能で豊かな暮らしを基本理念として、自然環境の豊かさを高め、低炭素社会への転換を進めることなどを方向性としています。</p> <p>中でも愛・地球博記念公園の西側一帯の公園西駅（磁気浮上式鉄道）周辺は、商業ゾーンに世界最大の家具量販店 I K E A（イケア）の誘致と、住宅ゾーンの宅地開発などで多くの人が利用する整備計画の拠点となる地域です。そんな公園西駅周辺は近自然工法を主流とした計画で、人や生物に優しい憩いの場所になるように駅前広場の整備とし、「近自然工法のコンセプト」が考慮された近自然公園や近自然調整池（2号調整池）が設計されました。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b>          近自然調整池（2号調整池）は、住宅地のある公園西駅の南東に位置し、愛・地球博記念公園や三ヶ峰丘陵などの自然と香流川を結ぶ拠点となります。</p> <p>施工方法については直線的・人工的な景観のコンクリートブロック積みの護岸は、天端に自然石で凹凸を作り直線的な天端に変化を付け、護岸法尻には寄せ土、置石によりアンジュレーションを付けて、違和感のあるコンクリートブロックを隠すと共に、自然な池形状と水際の多様性を創出した。</p> <p>高低差のある流入口は分散落差工によりステップ&amp;プールを創出した。池底が平坦な浅い箇所は、現状の湿地状態を活かし、深みや浅瀬など変化のあるエコトーン・ビオトープ空間を創出した。</p>	
	

## ◇学校ビオトープ特別賞

名 称	老蘇小学校ビオトープ
受賞者	ビオトープ企画委員会、近江八幡市立老蘇小学校、株式会社ラーゴ、大栄土木株式会社
<p><b>【テーマ・概要】</b>          当ビオトープは平成 13 年度 PTA 本部事業として造成工事をスタートした。今年で 22 年目を迎える。固有の生物や植物などを守り、生き物生息の場所、学習活動の場所、地域交流の場所として親しまれている。講師を招いて自然観察会を実施し、保護者と子どもと一緒に昆虫や植物について学び合う姿がある。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b>          平成 14 年度に立ち上げた老蘇小学校ビオトープ委員会を中心に、地域の方や PTA の OB の方々の協力を得ながら、整備作業を実施した。</p> <p>圃場整備によって失われる予定であった地域の水路の石組と植生を移設し復元した。</p> <p>以降、地域の方や PTA、OB、先生、専門家が協力しあい、除草、泥上げ、観察会、モニタリング調査などおこなっている。また、ビオトープではコンサートなども開催され、地域交流の場としても活用されている。</p>	
	

## ◇環境教育賞

名 称	広島県立湯来南高等学校ビオトープ
受賞者	広島県立湯来南高等学校
<p><b>【テーマ・概要】</b>          3年前はビオトープの存在自体ほとんど知られておらず、その時はただの水溜りの様にしか見えなかったが、科学部の生徒たちとともに日々汗を流し、ビオトープとその周辺の整備を進めてきた。その結果、ビオトープを拡大化させることができ、モリアオガエルをはじめ、毎年多くの生物を観測できるビオトープが再建できた。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b>          今のビオトープの課題として、アオミドロの繁茂、猪や猿に荒らされる被害がある。今後も整備を進め、ホテルの見られるビオトープ、生徒たちの憩いの場となれるビオトープを目指して、科学部の生徒たちを中心に活動していく。具体的には柵を設置したり、カワニナを近隣の川から移入したり、太陽電池で稼働する水流ポンプを利用した噴水を設置するなどして、持続可能なより良いビオトープを完成させたい。</p>	
	



## その5. 都立野川公園

農学博士、元東京農業大学  
日本ピオトープ協会顧問

立川 周二



首都東京の過去の自然、武蔵野と呼ばれた環境を現在に見るならば、この都立野川公園をお薦めします。もとは国際基督教大学のゴルフ場でしたが、都が「武蔵野の森構想」をもとに造成し、1980年に新たに都立公園として開園しました。ゴルフ場の芝地などは公園緑地として再利用されていますが、多くの部分は武蔵野の景観を復元しています。その中で最も重要で魅力的な場所は、湧水の細かな流れと「野川」を結び、国分寺崖線の斜面林と湿地や草地を残した「自然観察園」です。公園の全面積は約40ha、そのうちの国分寺崖線に沿った範囲を市民が武蔵野の自然に浸り、細やかに観察もできる場所としました。この武蔵野を色濃く残す環境を維持管理しているのは、市民のボランティアの力によります。崖線(ハケ)から湧出した水は雑木林の中の水路を流れ、湿地と池を潤し、また野川に流入して貴重な水源となっています。このような多様な生態系には、多様な生きものが共生の場、つまりピオトープを共有しています。この生きものたちは、もちろん地球の変化の歴史を乗り越えた強者で、世代を繰り返し生きぬいて現在に至りました。自然観察園に立てば、身近な自然に生きてきたヒーロー達を、現実として見る事ができるわけです。私たちヒトは今や過大な力を持ち、地球と言う星の命運を分け得るほどの存在になりました。私たちが共生する生きものたちに関心をもつことは、環境への意識を高め、その保全と持続可能な社会の実現を考える第一歩になります。環境を破壊するような、愚かな暴君にならないための生きた教訓です。

自然観察園には、110名を越える人々がボランティアとして集まり、グループに分れて活動しています。そのグループは、植物・野鳥・昆虫・作業・ホタル・手細工・事務局の7つに分けられ、各人は複数のグループを希望して所属することもできます。真夏の炎天下、または冬の凍てつく土を掘り起こし、増えすぎる外来雑草などを制御する様子を見せていただきました。除草の道具は小さな鎌や剪定鋏、または素手などにより、対象を確認しながらの選択的除草です。年間を通して各種の手作業は楽な仕事ではなく、厳しい作業のみです。この労苦は、来園の人たちが目にする生きものが、健全な生活をしていることを、実感していただくことで報われます。

本文をまとめるにあたり、野川公園副所長の金本敦志様、自然観察センターの山田陽子様、同赤田晴香様、そして「野川公園緑の愛護ボランティアの会」の皆様大変お世話になりました。ありがとうございました。



図1. 公園の北側は国際基督教大学のキャンパスです。その境界に沿って、自然観察園があり、その南側をこの様に野川が流れています。



図2. 自然観察センター(改築中)には武蔵野の公園パートナーズのパークレンジャーが常駐し、ボランティアの皆さんの活動拠点になっています。



図3. 観察園の入り口には、季節の動植物の見どころ、園内案内や心得などが提示され、訪問者の簡単な手引きにもなっています。



図4. 園内の歩行は木道により安全安心ですが、立入禁止の部分は生きもののためですので、お守り下さるようご理解をお願いします。



図5. ニリンソウやフタリシズカなど。湿地から乾燥地へ移行する、環境の変化を現わす貴重な植物種をご覧ください。



図6. エビネやキンランなどは武蔵野の雑木林の下草でしたが、見かける機会がなくなり、観察できることは大変うれしいことです。



図7. 野川のホタルは、古くから数の多いことで知られていましたが、今や局所に残すだけとなり、国分寺崖線の貴重な生きものです。



図8. 都心では既に見られないチョウ類、例えばセセリ類では、ギンイチモンジ、コチャバネ、図のミヤマチャバネなどが生存します。



図9. バッタ類は著しく衰退しましたが、このショウリョウバッタモドキやヒメギスも健在で、クツワムシも生息しているようです。

## 編集後記

本号では「グリーンインフラとビオトープ」をテーマにし、普及促進が進むグリーンインフラとビオトープとの関わりについて取り上げました。

巻頭言では、環境省自然環境局長 植田明浩様より「ネイチャーポジティブの実現に向けた民間等の活動促進」と題して、変化する自然環境行政について様々な視点から解説いただきました。

福岡孝則先生の特別寄稿では、グリーンインフラの実装を都市スケール、敷地スケール、人やプラットフォームの視点からビオトープの課題と可能性についてとても意義深い投稿をいただきました。本論で紹介のあった農大キャンパス内に造られた食庭&雨庭づくりの仕組みもとても興味深く拝読しました。

神垣様のシリーズ連載はカエルについて、会員・BA投稿では3名の方から素晴らしい写真や資料を交えた事例報告をいただきました。特に立川先生には「伊勢原ホテル水路づくり」の総括と同時に本活動に尽力された故櫻井淳さんの思い出を寄稿いただきました。

その他、各委員会、地区活動、総会フォーラム、ビオトープ顕彰の紹介、報告等、本号も盛りだくさんの内容となりました、ぜひご活用ください。

本誌発行にあたり大変お忙しい中、ご執筆いただきました先生方、関係各位の方々に心より感謝申し上げます。

編集委員:情報委員 若月学・砂押一成、正副会長、総務委員、本部事務局

## 自然との共生をめざして一緒に活動しませんか。 会員募集中

- |       |  |
|-------|--|
| 会員の種類 | ・法人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する法人         |
|       | ・個人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する個人         |
| 年会費   | ・法人正会員 100,000円                          |
|       | ・個人正会員 10,000円                           |
|       | 10月以降3月末までのご入会は規程により、年会費は半期分となります。       |
| 会員の特典 | ・年2回発行の機関紙「ビオトープ」の入手。                    |
|       | ・会員メーリングリストによりE-Mailによるシンポジウム、研修会等情報の入手。 |
|       | ・その他、地区活動への参加など。                         |

入会手続き、入会申し込み用紙については、WEBページ<https://www.biotope.gr.jp/application/apply/>または下記本部事務局までメールかFAXでお問い合わせ下さい。

## 日本ビオトープ協会誌「ビオトープ」No.54

2024年(令和6年)8月31日発行

発行所	特定非営利活動法人 日本ビオトープ協会
発行責任者	久郷 慎治 (日本ビオトープ協会 会長)
編集	協会 情報委員会・正副会長・総務委員会・本部事務局
本部事務局	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-6-7-101 TEL 03-6304-1650 FAX 03-6304-1651 E-Mail honbu@biotope.gr.jp URL <a href="https://www.biotope.gr.jp/">https://www.biotope.gr.jp/</a>

### 会員、ビオトープアドバイザーからの投稿歓迎

ビオトープの研究、実践事例等、会員・ビオトープアドバイザーの投稿を募集しています。投稿頂く場合は本部事務局までご一報下さい。





ニューヨークハイライン  
(アメリカ ニューヨーク)  
写真 鈴木 元弘 副会長 撮影